

## 第4回国際マイノリティアーティストコンテスト

2025/12/03

国連人権高等弁務官事務所

11月25日、2025年国際マイノリティアーティストコンテストの授賞式がスイス・ジュネーブで行われた。2025年のテーマは「帰属・場所・喪失」。強制移動、環境破壊、構造的レイシズム、世代間トラウマによってアイデンティティが形づくられてきた世界中のアーティストから、240点以上の作品が寄せられ、その中から4人が受賞し、さらに4人が特別賞に選ばれた。

「アートは私の存在であり人生である。アートなしでは、私は生き延びることができなかった」とクルドとシリアにルーツを持つドイツ在住で元政治囚の Kheder Abdulkarim は語った。彼の作品は、迫害をうけ文化や存在が抹消されそうになった経験にもとづくもので、今回特別賞を受賞した。受賞者の一人、パレスチナとシリアにルーツを持つダンサー・振付師である Alia Al-Saadi は、ヤルムークにあるパレスチナ難民キャンプ\*で難民三世として生まれた。彼女は自身のパフォーマンスについて、「暴力に長くさらされることで衝撃を感じなくなる心理的麻痺の状態」を表していると述べた。さらに、若者部門での受賞者、ジャマイカ出身でバルバドスに拠点を置く Lindsee Collins の作品は、アートと法の交差点に焦点を当てている。「多くのマイノリティの物語はこれまでマイノリティ自身で語られませんでした。だからこそ、正義と帰属意識とは、自分たちの物語を取り戻し、自らの視点で語り直すことなのです」。

\*シリアの首都ダマスカス近郊に位置する

\*\* 受賞作品集はこちらから

【記事全文】 [Minority artists transform loss into resistance and belonging](#)

## 人種差別撤廃条約の国連採択 60 周年記念イベント

2025/12/04

国連人権高等弁務官事務所

人種差別撤廃委員会は本日、[人種差別撤廃条約](#)の国連採択 60 周年を記念したハイレベルイベントを開催した。冒頭、ゲイ・マクドゥーガル副委員長は、人種差別撤廃条約の採択は、国連創設からわずか 20 年後に達成された偉業である。ある人の命は別の人の命よりも優れているという虚偽の言説により、命、人生、そして夢を奪われた数百万もの人びとのことを想起し、その悲しみを分かちあいたいと述べ、最後に、黙祷を捧げるよう呼びかけた。また、ナダ・アル＝ナシフ国連人権副高等弁務官は 60 年を経た今も、条約の目的である「あらゆる形態の人種隔離や人種差別のない世界を築くこと」は達成されていない。このような状況のなか、人種差別撤廃委員会の活動は不可欠であると述べた。さらに、ミハウ・バルチェザック委員長は、60 年にわたり、人種差別撤廃条約は、加盟国の憲法改正を促し、国内法の制定を後押しし、市民社会のエンパワメントに貢献してきた一方、構造的で制度的なレイシズムは世界各地で依然として存在していることを指摘し、各国に対し、条約の国内実施を強化し、条約機関のシステムと手続きに全面的に協力することを求めた。その後、3 つのパネルディスカッション「条約 60 年：条約の実施・グローバルからローカルまで 一進展と課題」、「人種、皮膚の色、世系又は民族的もしくは種族的出身一 区別のない平等の約束を実現する」、「条約 60 歳 一現役で活躍する文書：成果を礎に未来を創る」が行われた。

\* イベントの模様は UN Web TV からご覧いただけます ([午前の部](#)、[午後の部](#))。

イベントプログラムは[こちら](#)。

【記事全文】[Committee on the Elimination of Discrimination Commemorates the Sixtieth Anniversary of the International Convention on the Elimination of All Forms of Racial Discrimination](#)